

HAKO ZAKI

箱崎 45

- 箱崎遺跡第66次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1164集



遺跡番号 HKZ-66
調査番号 1011

2012

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄してきました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務であります。

箱崎地区は筥崎宮の門前町として、古くから栄えてきた地域ですが、近年、再開発事業や民間の開発が急速に進み、古い町並みが失われてきています。本市教育委員会では、それらの開発については、事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世に伝えるよう努めています。

本書は、店舗付共同住宅建設に先立って、平成22年度に実施した箱崎遺跡第66次調査の成果を報告するものです。調査では中世筥崎宮の門前町の一画を検出し、箱崎地区的地域史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、委託者をはじめとして、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成24年 3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

凡　例

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成22年(2010)度に福岡市東区箱崎1丁目2699-1で調査を実施した発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は山崎龍雄が担当して行った。
- (3) 遺構・遺物の実測は山崎が行った。
- (4) 本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。
- (5) 調査で出土した中世輸入陶磁器の分類については『太宰府条坊跡 XV - 陶磁器分類編 - (2000 年 太宰府市教育委員会) を参考にした。
- (6) 遺構の撮影は山崎が行った。
- (7) 本書に使用した方位は磁北であり、真北とは $6^{\circ} 18'$ 西偏する。
- (8) 本書 Fig. 2 の調査地点位置図は『福岡市文化財分布地図 東部 I (平成 7 年 3 月現在) を使用した。
- (9) 土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
- (10) 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (11) 本書の執筆・編集は山崎が行った。

本文目次

第1章 はじめに	3
1 調査に至る経緯	3
2 調査の組織	3
第2章 立地と歴史的環境.....	4
1 立地	4
2 歴史的環境	4
第3章 調査の記録	6
1 調査の概要	6
2 遺構と遺物	6
①溝状遺構	6
②井戸	8
③土坑	11
④擾乱・不明遺構出土遺物	19
⑤ピット出土遺物	19
⑥遺構面・表土出土遺物	20
⑦各遺構出土金属製品	21
3まとめ	21

挿図目次

Fig.1 箱崎遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)	5	Fig.9 SE023・025出土遺物 (1/3).....	13
Fig.2 箱崎第66次調査地点位置図 (1/5,000) ...	5	Fig.10 各土坑 (1/40)	15
Fig.3 調査区現況図 (1/300)	6	Fig.11 各土坑出土遺物 1 (1/3).....	16
Fig.4 遺構全体図 (1/100)	7	Fig.12 各土坑出土遺物 2 (1/3).....	17
Fig.5 SD075 (1/60)	8	Fig.13 SX003・019・073出土遺物 (1/3)	18
Fig.6 SD075出土遺物 (1/3)	9	Fig.14 ピット出土遺物 (1/3)	18
Fig.7 SE020・023 (1/50)	10	Fig.15 遺構面・表土出土遺物 (1/3)	19
Fig.8 SE020出土遺物 (1/3)	12	Fig.16 各遺構出土金属製品 (1/2・1/1)	20

写真目次

PL.1 (1) I区調査区全景 (北から) (2) SE020 (北から) (3) SE020井筒 (西から)	22
PL.2 (1) II区第1面全景 (北から) (2) II区第2面全景 (北から)	23
PL.3 (1) II区第3面砂丘面 (北から) (2) SD075 (西から) (3) SD075西壁土層 (東から)	24
PL.4 (1) SK035 (南から) (2) SK035土層 (南から) (3) SK035遺物出土状況 (東から)	25
PL.5 (1) SK009 (北東から) (2) SK032 (南から) (3) SK057 (北西から) (4) SK074 (南西から) (5) SK078 (西から) (6) SK091 (南西から) (7) SP055 (南から) (8) SP076 (南西から) ...	26

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成22年1月6日受付番号22-2-711で、福岡市東区箱崎1丁目2699番1号に個人から一部店舗付共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財の有無について（照会）」が提出された。これを受け埋蔵文化財の審査を行った結果、申請地は以前平成19年4月18日付19-2-51で事前審査願いの書類が提出され、平成19年4月25日に行った試掘調査で遺構を確認し、要調査としていた。以上から開発に先立っては記録保存のための調査が必要であるとして、事業者と協議を行った。協議の結果、調査にかかる費用は原因者負担しながらも、申請者が個人であることから、一部国庫補助金を適用して、発掘調査を行うこととした。本調査は平成22年（2010）6月14日～7月13日までを行い、報告書作成の整理作業は平成23年度に行なった。

調査にあたっては、事業者、設計担当や工事担当業者の皆様には多大の協力を賜った。また周辺住民の皆様には調査期間中ご理解を得、調査を無事に進めることができました。文末ではありますが、記して感謝の意を表します。

2. 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査委託	個人
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課長 田中 寿夫 埋蔵文化財第2課調査第2係長 普波 正人
事務担当	埋蔵文化財第1課管理係 井上 幸江
事前審査担当	平成19年度 埋蔵文化財第1課事前審査係 本田 浩二郎 平成22年度 埋蔵文化財第1課主任文化財主事 加藤 良彦 事前審査係 木下 博文
調査担当	埋蔵文化財第2課主任文化財主事 山崎 龍雄(現、埋蔵文化財センター主任文化財主事)
調査作業	安藤健典 井上澄敏 河崎征治 高手與志子 竹原吉秋 中島規久生 中野容子 中山洋治郎 中山竜太 花田昌代 松村和江 安本尚子
整理作業	木藤直子

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
HKZ-66	1011	福岡市東区箱崎1丁目2699番1号	193.69m ²	127.3m ²	店舗付共同住宅	2010.06.14～07.13	山崎龍雄

第2章 立地と歴史的環境

1. 立地

箱崎遺跡は福岡市の北東部、博多湾沿いに連なる古砂丘上に立地する弥生時代終末から近世に至る複合遺跡である。この古砂丘は箱崎砂丘と呼ばれ、砂丘上には西から藤崎遺跡・西新町遺跡・博多遺跡群・堅粕遺跡・吉塚遺跡など著名な海浜遺跡が立地している。箱崎遺跡はこの古砂丘の北端に位置し、この砂丘は東側を宇美川、北側を多々良川が流れて限定される。古砂丘の箱崎地区におけるピークは筥崎宮周辺にあり、その標高は3.5m程である。高所部を取り巻く標高3.0mの尾根が北東方向に延び、その東西は緩斜面となる。箱崎遺跡の範囲は東側がJR鹿児島本線、西側が元寇防壁推定線の東側、南側が吉塚駅北側あたり迄で、現状では東西約500m、南北約1000mの範囲となるが、市街地化が進んでいる地区があるので、不明な所もあり、範囲が拡大する可能性もある。

今回調査した第66次調査地点はこの箱崎遺跡の中央部、筥崎宮の北側約160m程離れた地点にある。主要地方道箱崎・直方線（通称大学通り）に面した細長い敷地である。北側には玉取恵比須社が隣接し、その北側には少し離れて第63次調査、道路西側には第3次調査、南側に第43次調査区がある。いずれも中世を主体とする遺構が確認されている。

2. 歴史的環境

箱崎遺跡のある箱崎地区は、延長元年（923）飯塚市筑穂にあった大分宮から遷座創建された筥崎八幡宮を中心に発達した門前町であり、中世は博多と同じように对外交易の港として栄えていた。箱崎の津は箱崎遺跡の東側内湾部宇美川河口に面した一帯に想定されている。箱崎遺跡周辺の弥生時代から古墳時代にかけての遺跡としては、箱崎から南に続く古砂丘上に博多遺跡群や吉塚遺跡、堅粕遺跡がある。多々良川を遡った内陸糟屋平野部には、縄文時代晩期末から弥生時代早期にかけての集落遺跡の江辻遺跡や多数の櫛棺墓地の蒲田遺跡、古代の官衙的大型建物群が出土した多々良込田遺跡などがある。また多々良川対岸の名島地区には古墳前期の前方後円墳名島古墳があった。中世になると多々良川流域には戸原麦尾遺跡、多々良遺跡や、大友氏に縁のある頭孝寺跡などがあり、多々良川の水運を利用した地域に遺跡が分布している。また筥崎宮一帯は文永の役（1274年）以降、元軍の再襲来を防ぐための元寇防壁が海岸砂丘線上に薩摩国によって築かれ、建武2年（1335）に、南北朝時代の始まりとなった足利尊氏・少弐氏と菊池氏が戦った多々良浜合戦もこの周辺で行われた。また箱崎周辺には、米一丸地蔵堂や勝軍地蔵堂などに多くの碑が存在する。戦国時代になると筥崎宮は豊後の大友氏と関わりが深くなり、立花城督の下で度々軍事行動を行っている。多々良川対岸の河口部の名島には立花城の出城として名島城が築かれた。名島城は豊臣秀吉の九州平定後には筑前国の国主となつた小早川氏の本城として近世城郭に改修され、慶長5年（1600）の關ヶ原合戦の軍功によって黒田氏が筑前国主となり、新たに福岡城を築城し、移るまで継続している。箱崎遺跡の調査は地下鉄2号線の建設に伴つて始まり、その後箱崎地区の再開発に伴つて調査が多く行われてあり、現在その調査次数は68次を数える。この急激に進む都市開発によって、落ち着きのあった箱崎の町並みが急速に失われてきている。

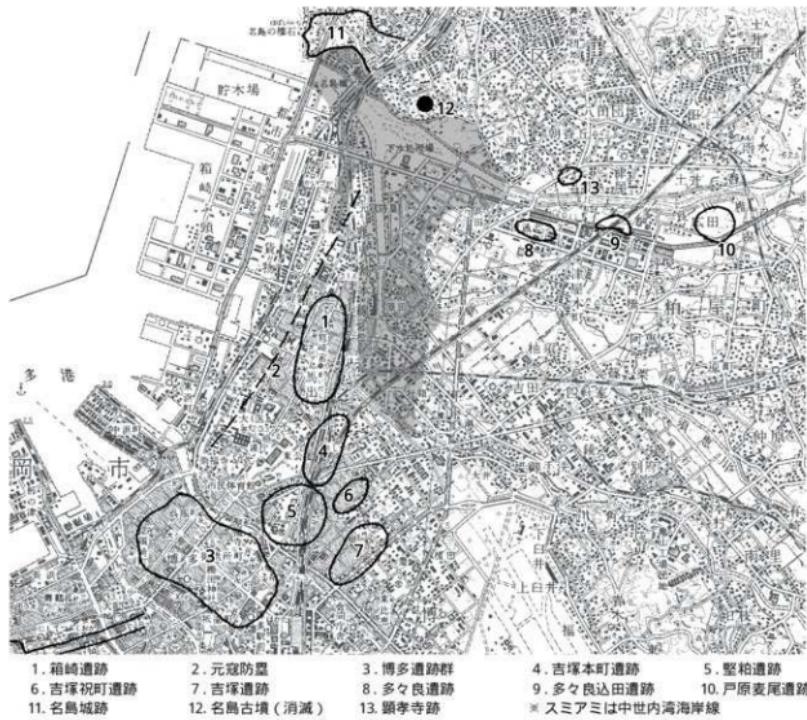


Fig.1 箱崎遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)



Fig.2 箱崎遺跡第66次調査地点位置図 (1/5,000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig3・4)

調査地は菅崎宮北側160m離れた通り沿いに面した細長い敷地である。調査は建物工事範囲を対象に行つたが、敷地一杯建物を建てるため、杭打ち工事を先行し、業者による表土鋤取り、廃土の場外搬出を行った。鋤取りは職員立会いの下、遺構面まで行い、調査の廃土は場内処理で行い、北側I区・南側II区での二分割の調査を行つた。I区は建物基礎攢乱が砂丘面深く入っていたので撤去を行い、その下で遺構を確認した1面の調査である。II区はI区に比べて攢乱が少なく上面の遺構が残っており、2面の調査となった。遺構面までの深さはI区1.7m、II区1.2mである。検出遺構は、I区は基礎による破壊を受けてそれ程多くなかったが、II区は遺構が良好に残り重複も激しかった。両区で検出した遺構は井戸3基（中世1、近世2）、溝2条、土坑19基、ピット・柱穴多数である。柱穴には根石を持つもの（PLS-7・8）もあったが、狭い調査区で、他遺構との切り合いもあり建物としてはまとめ得なかった。出土遺物はパンコンテナ21箱出土した。大半が中世から近世にかけてのものである。古代の土師器・須恵器など、菅崎宮創建時に近い遺物も僅かであるが出土した。

2. 遺構と遺物

① 溝状遺構

SD075 (Fig.5・6, PL.3-2・3)

II区西側第1面で検出した東西方向の溝。他遺構との切り合いや、北側と東側は建物基礎で壊され、遺構の残りは不良であるが、残存部から残存長5m、幅1.7m、深さ1m前後である。溝の断面は砂地で崩れてはいるが、逆台形に近い形態である。埋土は黒色粘土から黒色土が主体で、下層部分は黄褐色粗砂を互層状に挟む。

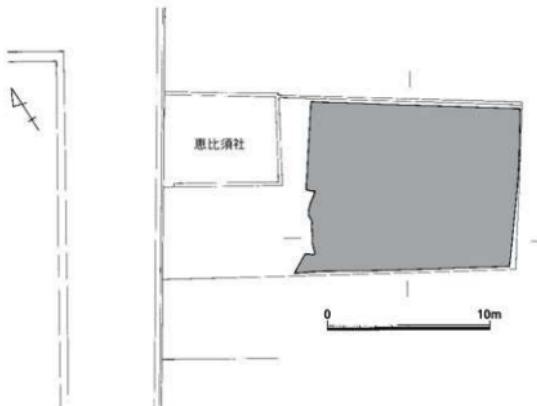


Fig.3 調査区現況図 (1/300)

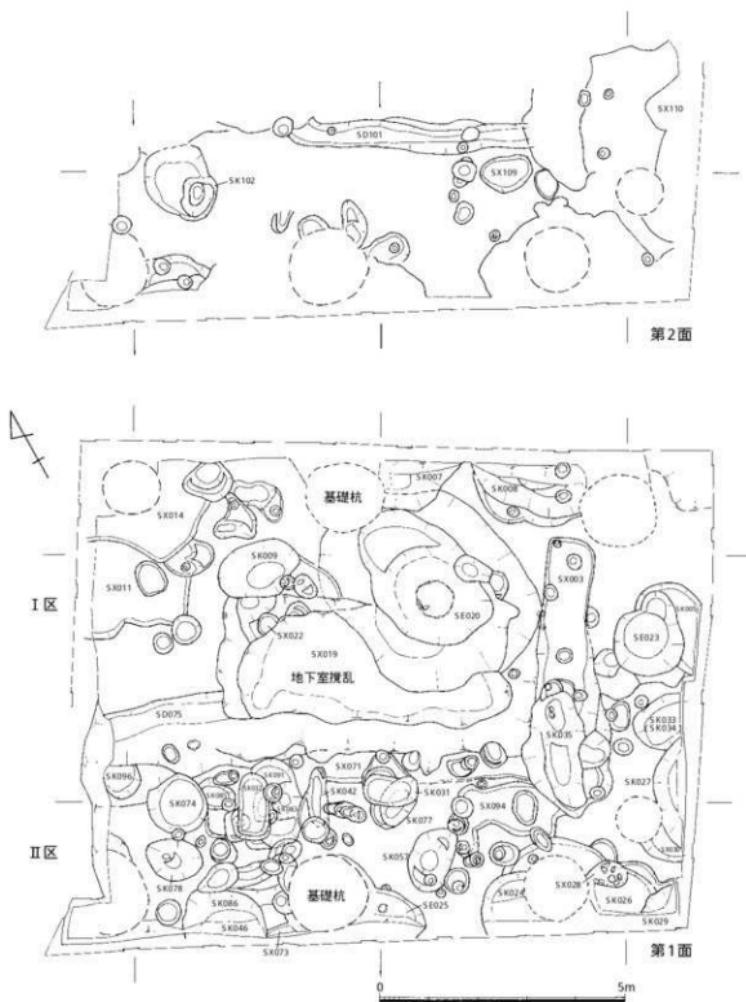


Fig.4 遺構全体図 (1/100)

出土遺物 中世の土師器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器、滑石製石鍋片、鉄滓、焼けた割石などが出土した。1～3は土師器。1・2は小皿。残存は各1/4片で、復元口径7.0cm・7.2cm、器高0.9cm・1.1cm。外底部糸切り、体部調整はヨコナデ。3は鍋口縁部片。調整はナデで内面ハケ目。4は瓦質土器の火舍の底部。平面形が方形を呈すと思われる形態で、足が1か所残る。調整は内面ヨコナデでハケ目が残る。外面は使用により剥落し、ススが付着する。5は瓦質の火舍か火鉢の口縁部。外面2条の三角突帯が巡

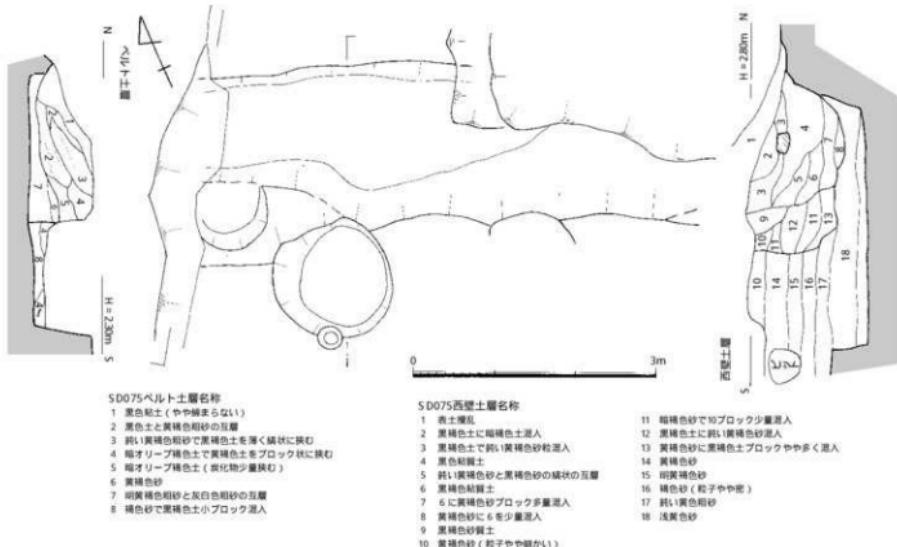


Fig.5 SD075 (1/60)

り、突帯の上には菊花のスタンプが連続して巡り、突帯中間には円形の貼付け文が巡る。内面は回転ナデ。全体に焼き締まる。6は土師質の火舌が火鉢の口縁部片か。外面1条の突帯が巡る。調整は回転ナデ。7・8は中国産白磁碗か皿の口縁部小片。7・8はいずれも口縁部剥げ。7は光沢がある釉がかかる。8は光沢を持つ明オリーブ灰色を呈す釉がかかる。9・10は陶器。9は壺口縁部1/4片。直口する口縁で、復元口径10cm。肩に耳が付いていた痕跡が残る。10は壺か甕の底部1/4片。底径16.4cm。11・12は同一個体と思われる土師質土器擂鉢。11は口縁部1/10片。復元口径28cm。調整は外側ナデで部分的にハケ目を加え、内面はヨコハケ目で5条のタテ櫛目が残る。12は底部片で内面5条の櫛目がある。13は滑石製容器の底部1/2片。底径42cm。外側ケズリ仕上げで、内面に工具痕残る。遺構の時代は出土遺物から13-14世紀頃であろう。

SD101 II区第2面で検出した東西方向の小溝。残存長は約5m、幅0.5m、深さ15cm程、埋土は褐色砂である。出土遺物は中世の土師器壊・小皿などの破片が少量出土。

② 井戸

SE020 (Fig.7・8、PL.1-2・3)

I区で検出した平面形が梢円形の井戸。南半分は建物基礎SX019下で検出した。規模は上面で長軸径4.65m、短軸径3.65mを測る。井戸底は二段掘りで、中央に幅約10cm、長さ約60cm程の板を丸く桶状に巡らした井筒があった。井筒の直径は0.75m程で、湧水がひどく完掘が出来ず、詳細は不明。確認した深さは標高0.2m程まで。井戸埋土は上層が暗黄褐色砂で黑色粒子が斑状に混ざり、下層が井筒内は暗灰黄色砂から暗青灰色砂質土、掘り方は黄褐色粗砂から鈍い黄褐色粗砂である。井筒に使用した板材の樹種は針葉樹である。

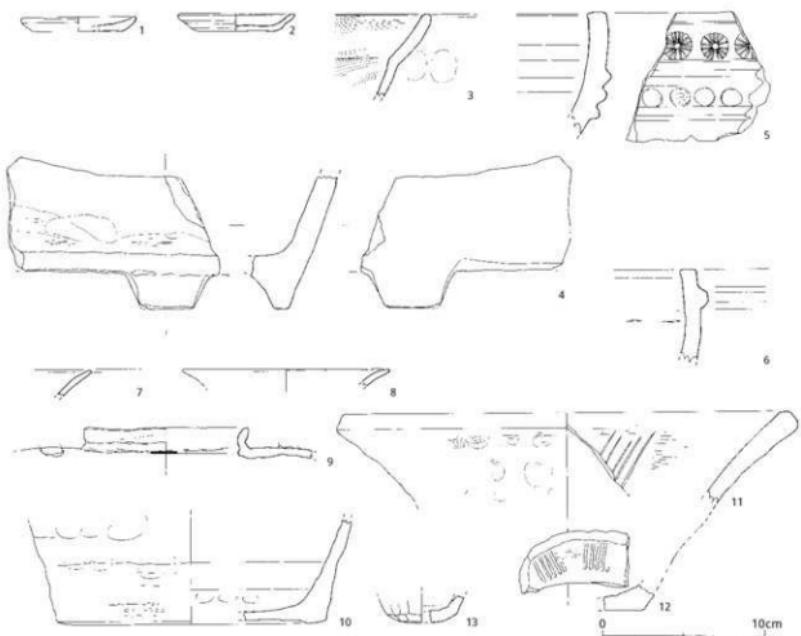


Fig.6 SD075出土遺物(1/3)

出土遺物 中世の土師器・瓦質土器・瓦器・瓦、中国産輸入陶磁器、鉄滓、石鍋片などと、少量の古代の須恵器も出土した。14~36は掘り方出土。14~21は土師器。14・15は小皿。14は底部片で復元口径6.2cm、器高0.9cm。15は1/6片。いずれも調整は体部回転ナデ、外底部は糸切りで、板目が残る。14は中層、15は下層出土。16~20は壺。1/6片・3/5片・1/3片・1/4片で、20は底部で一部口縁が残る。16は口縁が大きく開く形態で、復元口径12.2cm、器高2.6cm。17・18は同形態。口径は17が12.6cm、18が13.4cm、器高は17が2.9cm、18が2.6cm。19は器高が2.1cmと低い。16~19の調整は体部が回転ナデ、外底部は糸切り、17には板目が残る。20は復元口径10.4cm、器高3.0cm。調整は体部回転ナデ、内底ナデ、外底部は回転ヘラ切りで板目が残る。形態から9世紀頃のものか。16・18は下層、19は上層、17・20は中・下層出土。21・22は楕体部から底部1/5片・1/2片。21は大型で鉢に近いか。底径12.0cm。22は底径7.0cm。いずれも調整は高台部回転ナデ、内底は不整ナデ。21・22は上層出土。23~29は白磁。23は高台を持つ形態でVII類皿の底部。底径5.2cm、高台部は露胎で釉色は暗オリーブ灰釉がかかる。24~26は大宰府白磁皿分類VII類の底部。25は1/3片。外底部までほぼ全面施釉。底径4.4cm・5.6cm・4.6cm。27~29はIX-1c類。27・28は1/4片、29は1/6片。復元口径10.6cm・10.4cm・11.4cm、器高は27・28は2.5cm・2.3cm。27・28の外底部は露胎で他は施釉。24は上層、25・29は中層出土、23・26~28は下層。30~36は青磁。30・33は龍泉窯系青磁碗。30・31は鎧連弁のII-b類か。31は口縁部1/8片。復元口径14.8cm。いずれも内外面光沢を持つオリーブ灰釉がかかる。32・33は底部片。32は低い高台を削り出す。33は見込みにヘラ切り文様がある。高台部露胎。重ね焼き痕跡が残る。34・35は同安窯系青磁。

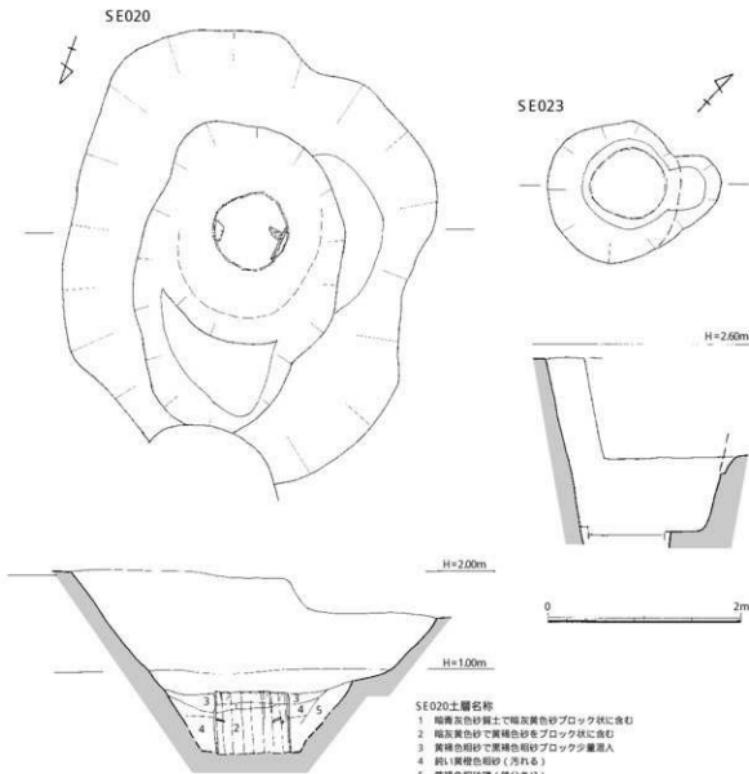


Fig.7 SE020・023 (1/50)

34はI-1b類。底径5.0cm。高台部は斜めに削り出し露胎。35は高台の形態から同安窯系とした。底径5.0cmを測る。36は坏III-3a類の1/2片。口径14.0cm、器高4.0cm。見込みは無文で、内外面綠灰色釉が厚めにかかる。高台疊付周辺は露胎。中・下層・底層の破片が接合。37は陶器で、頸部が綿まり口縁が内傾する壺か。1/6片で復元口径10.8cmを測る。口縁内面に粘土塊が付着する。暗赤褐色釉がかかる。肩部に耳のつく可能性もある。38-45は井筒内出土。38-42は白磁皿。いずれもIX類か。38は口縁部1/8片で、復元口径12.0cm。39はIX-1b類の1/4片。復元口径9.8cm。薄い灰オリーブ釉がかかる。40はIX-1C類と思われる口縁部小片。41はIX-1b類。底部1/2片で復元底径5.6cm。外底部露胎。明確ではないが見込みにヘラ切り文様がある。42はIX-3b類の口縁部小片。以上の皿の口縁内面は口禿げ。43は鎬蓮弁の龍泉窯系青磁碗II-b類。1/10片で復元口径15.8cm。内外面オリーブ灰釉がかかる。44-45は陶器。44は壺底部1/3片。復元底径7.8cm。外面ケズリで、内外面黒褐色釉がかかる。45は口縁部小片。外面暗赤褐色釉、内面純い黄色釉がかかる。胎土色調は灰色で精良。46は瓦器椀底部1/3片。底径は6.4cm。調整はやや摩滅するが、丁寧で平滑なナデ仕上げ。38-40・42・43・46は井筒底、41・44・45は井戸内

出土。47は白磁碗底部を再利用した瓦玉または円板。直径5.6cm×6.7cm。見込み・高台部は明オリーブ釉がかかるが、高台内面は露胎。割口は粗い調整。見込みは不明な印花文がある。遺構の時期は以上の遺物から13~14世紀頃であろう。

SE023 (Fig.7~9, PL.4~4)

I区東壁沿いで検出した円形井戸で北側に半円形の張出しが付く。規模は直径1.45mを測る。北側の張出し部は0.75×0.4m程で他遺構との切り合いの可能性もあるが、井戸と同じような深さであるので同遺構で、井戸掘削時の作業スペースの可能性がある。深さ1.75m程掘り下げた面（標高0.5m程）で、黒灰色の粘性泥土の円形痕跡を確認した。この部分が井筒痕跡と思われるが、深く崩落の恐れがあるので、掘削を断念した。状況から桶組と思われるが詳細は不明。

出土遺物 近世の国産陶磁器・瓦質土器・土師質土器・瓦類と中世の土師器・土師質土器、中国産輸入陶磁器などが出土。48~50は陶器。48は高取焼の竹節壺。完形で口径3.5cm、器高23.4cm、底径11.0cm。外面は光沢のある黒褐色釉がかかり、外底部は露胎。回転糸切り。体部は3条の沈線が巡り、竹節状を呈し上半4か所窪む。上層出土。49は碗1/3片。復元口径11.4cm、器高4.7cm。器表には暗褐色釉がかかるが、見込みは輪状の釉掻き取り、疊付は露胎。中層出土。50はほぼ完形の白磁の灯火具ヒヨウソク。口径5.9cm、器高5.3cm。火皿の部分には注口がある。灰白色の釉がかかるが、外底部は露胎。51は瓦質土器の火鉢口縁1/4片。口径27.8cm。表面丁寧なナデであるが、火による摩滅が著しい。52・53は丸瓦。53は玉縁部が残る。残存長は23.7cm・25.4cm、最大幅14.1cm・13.7cm。調整は凸部丁寧なタテナデかミガキ、凹部は細かい布目痕が残る。52の外面には刻印がある。54はガラスの薬瓶。全長5.2cm、幅2.8cm。表面に健脳丸、丹平商会と打出されている。丹平商会は丹平製薬株式会社の前身で明治27年創業、健脳丸は便秘薬として、明治29年から販売されているロングセラーの医薬品である。上層出土であり、時期から見て混入品である。遺構の時期は以上の遺物から江戸時代後期頃であろう。

SE025 (Fig.9) 55は土師器小皿1/2片。復元口径7.4cm、器高1.9cm。調整は体部回転ナデ、内底はナデ、外底部糸切り。色調は橙色、胎土精良、焼成良好。

⑤ 土坑

SK008出土遺物 (Fig.11) 56は瓦玉。瓦片を再利用したもの。直径2.9×2.8cm、厚み1.8cm。側面は粗削成形で、上面は丁寧なナデ、下面は布目痕が残る。

SK009 (Fig.10~11, PL.5~1)

I区西側で検出した平面形が不整梢円形状を呈す土坑。上部は建物基礎攪乱を受けている。確認規模は長軸長1.70m、短軸幅1.15m、最大深さ0.48mを測る。埋土は黒褐色砂質土が主体。

出土遺物 中世の土師器・須恵器・瓦器・中国産陶磁器・鉄釘などが少量出土。57~62は土師器。57~59は小皿。復元口径7.0cm・8.0cm・10.8cm、器高1.4cm・1.5cm・1.1cm。いずれも外底部糸切り、焼成はやや軟。60~62は壺。残存率1/4片・2/3片・1/6片、復元口径10.6cm・10.6cm・13.0cm、器高2.3cm・3.1cm・2.6cm。調整は体部回転ナデ、外底部は糸切り。63・64は青磁。63は龍泉窯系の小型碗又は杯底部1/2片。表面は光沢のあるオリーブ灰色の釉が施釉されるが、疊付は釉を搔き取る。内底はヘラ切り草花文。64は碗の口縁部片。表面光沢のあるオリーブ灰色釉がかかり、貫入が入る。65は中世須恵器か瓦質の鉢口縁部小片。口縁は玉縁状を呈し、上端と外側は黒い。擂鉢か捏鉢。遺構の時期は以上の遺物から13~14世紀頃であろう。

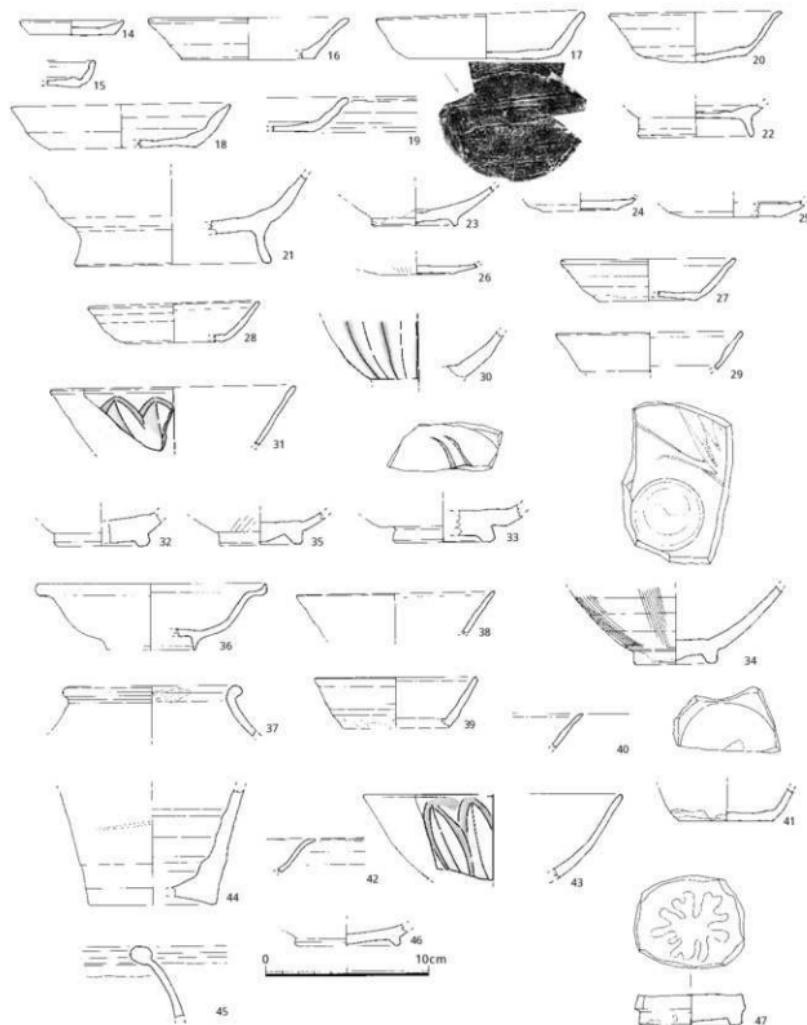


Fig.8 SE020出土遺物 (1/3)

SE023

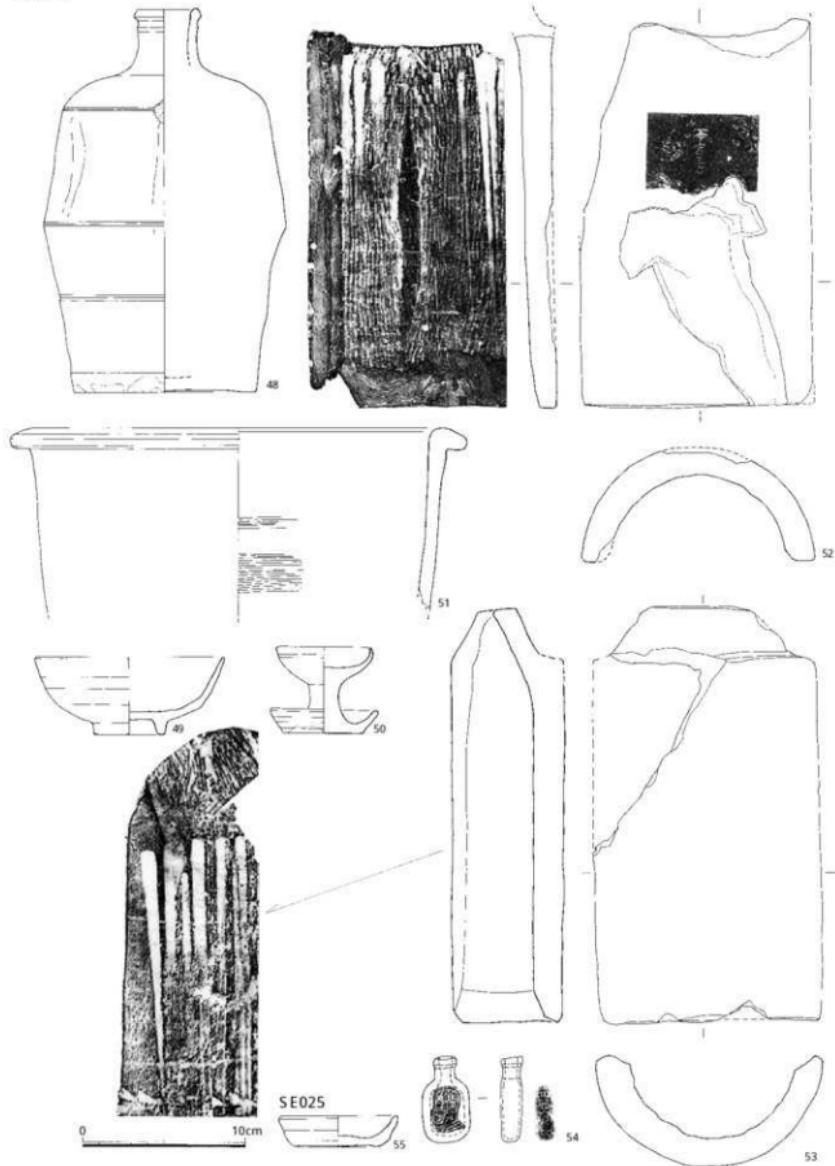


Fig.9 SE023・025出土遺物 (1/3)

SK024・026・027出土遺物 (Fig.11・12) 66はSK024出土の近世の泥面子か。横長2.8cm、縦長2.0cm。色調は灰白色、胎土は良好。他に鶏の大腿骨が出土。67はSK026出土。土師器鍋の口縁部小片。内面ヨコハケ目、外面はススが付着する。111は手持ち砥石片。長さ10.0cm、幅2.8cm、厚さ2.6cm。4面が砥面で、石材は安山岩か。68はSK027出土。土師器小皿1/7片。復元口径8.4cm、器高1.2cm。体部回転ヨコナデ、外底部糸切り。

SK031 (Fig.10・11、PL.4- 5)

II区中央で検出した隅丸長方形状を呈す土坑。主軸は東西に取る。確認規模は長軸長1.15m、短軸幅0.65m、深さ0.18mを測る。埋土は粘性を持つ黒褐色土で黄褐色砂を混入する。出土遺物 中世の土師器・中国産白磁・青磁などが少量出土。69～72は土師器。69～71は小皿。1/4片・1/6片・1/8片で、復元口径9.0cm・9.4cm・10.2cm、器高は1.2cm・1.3cm・1.0cm。調整はいずれも体部回転ヨコナデ、外底部は糸切り。72は坏口縁部1/6片。復元口径15.0cm、復元器高3.1cm。体部回転ヨコナデ。73は白磁碗IV類の口縁部1/9片。復元口径14.6cm。外面光沢のある灰白色釉がかかる。遺構の時期は以上の遺物から12世紀後半頃であろう。

SK032 (Fig.10、PL.5- 2) II区中央で検出した主軸を南北に取る隅丸長方形状の土坑。確認規模は長軸長1.40m、短軸幅0.63m、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色土で鈍い黄褐色砂を混入し、少し炭化物粒子を含む。出土遺物は中世の土師器・須恵器・中国産白磁などが少量出土。

SK033・034出土遺物 (Fig.11) 74～76は土師器でSK033・034上層出土。74は小皿1/4片。復元口径8.3cm、器高0.9cm。75・76は坏1/6片・1/3片。75の復元口径11.6cm。76は底の深い坏。調整は体部回転ヨコナデ、外底部糸切り。77・78はSK034出土。土師器小皿1/3片・1/4片で、復元口径8.2cm・9.0cm、器高は1.0cm・1.1cm。体部は回転ヨコナデ、外底部は糸切り。SK034では他に青磁龍泉窯系鑄蓮弁碗の細片が出土。遺構の時期は以上の遺物から13世紀頃であろう。

SK035 (Fig.10～12、PL.4- 1～3)

I・II区境界で検出した主軸を南北に取る土坑。平面形は不定形状を呈す。上面は攪乱が入る。確認規模は長軸長2.73m、短軸幅1.80m、深さ0.92m。断面は逆台形状を呈し、東側側面は狭いテラスがある。埋土は上層が黒褐色砂質土または粘質土、下層は褐色砂から黄褐色砂の砂丘砂に近い。土層から見ると掘り直したは遺構の切り合いの可能性もある。底面は北側が一段深くなり、この部分に完形に近い土師器の坏2個体が出土した。

出土遺物 中世の土師器・須恵器・中国産陶磁器や上層から近世の遺物が混入で出土。79～91は土師器。79～84は小皿。79・81は1/3片、80・83は1/4片、82は1/6片、84は1/5片。復元口径6.8cm・8.0cm・8.0cm・7.8cm・8.6cm・10.4cm、器高1.9cm・1.7cm・1.6cm・1.3cm・0.9cm・1.5cm。調整は体部回転ナデ、外底部糸切り、81は灯明皿に使用されたのか口縁部にススが付着する。いずれも胎土や焼成は良好。85～89は坏。85は1/6片、86は4/5片、87・89はほぼ完形、88は口縁のみ1/2欠。口径11.2cm・12.8cm・13.0cm・12.6cm・13.6cm、器高2.6cm・3.3cm・3.1cm・2.9cm・3.4cm。調整は、体部は、85は摩滅するが、他は回転ヨコナデ、外底部は回転ヨコナデ。90・91は椀底部。90は1/6片。高い高台が付く。復元底径6.0cm。91は1/4片で、復元底径6.6cm。調整は、90は摩滅し不明、91はヨコナデ。92～94は瓦質土器。92は片口の擂鉢の口縁部小片。内面に5条のタテ櫛目が残る。口縁部外面はヨコハケ目。93は火鉢の口縁部小片か。調整は丁寧なナデで、外面菊花のスタンプ。94は鍋1/8片。復元口径23.6cm。内面は密なヨコハケ目。外面ナデでススが付着する。95～97は白磁。95・96は碗。95は小碗XI- IIIの口縁部か。

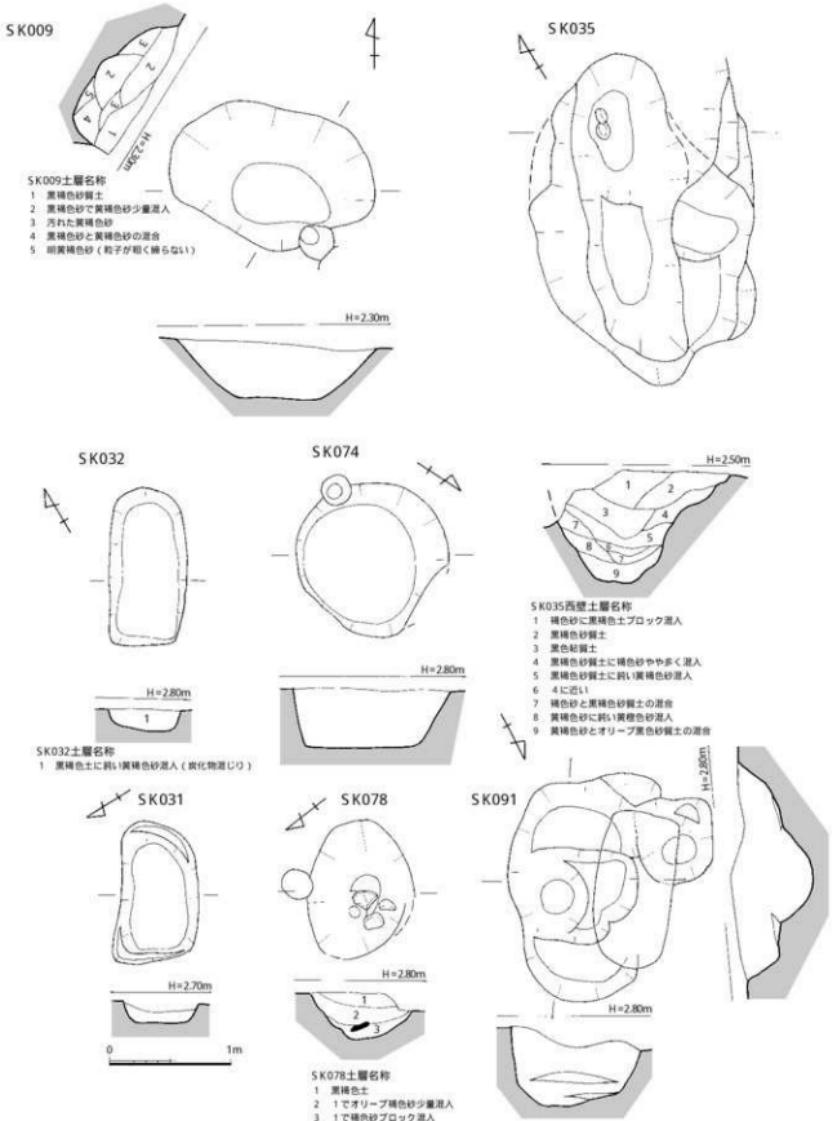


Fig.10 各土坑 (1/40)

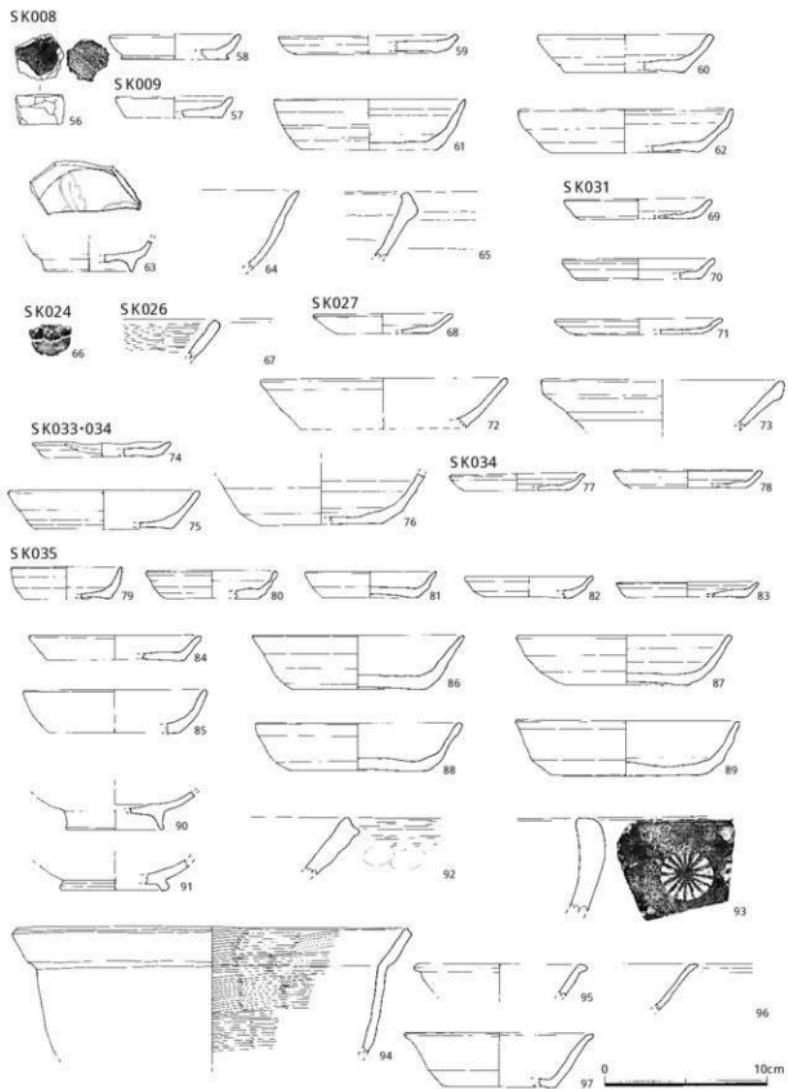


Fig.11 各土坑出土遺物 1 (1/3)

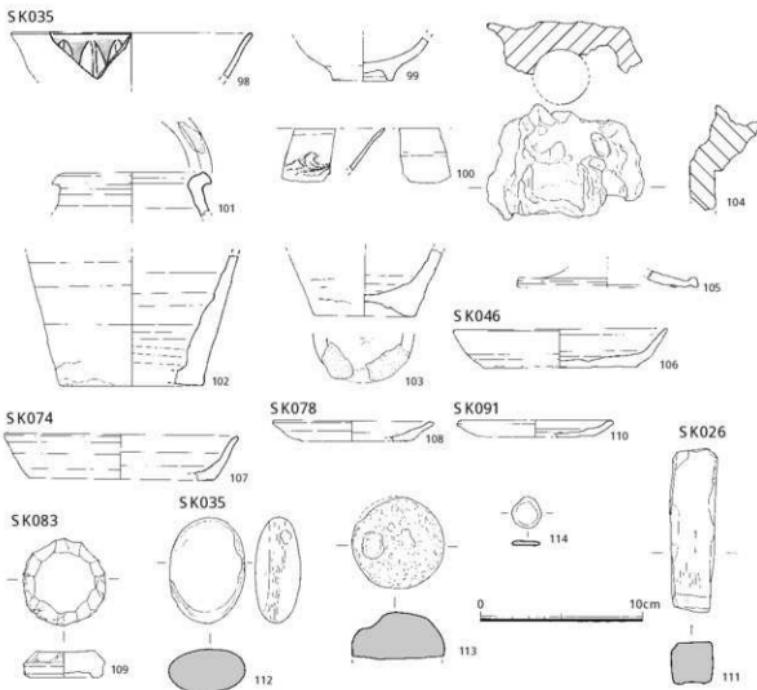


Fig.12 各土坑出土遺物 2 (1/3)

復元口径10.6cm。不透明な灰色釉がかかる。96はV類の口縁部小片か。表面には乳白色の光沢のある釉がかかり、内面は釉垂れがある。97は皿IX類の1/4片。復元口径11.4cm、器高3.3cm。内外面光沢のある灰オリーブ釉がかかるが、口縁端部は釉を掻き取る口剥げ。98・99は龍泉窯系青磁碗。98はII-b類口縁部1/8片。復元口径14.6cm。光沢のある厚手の緑灰色釉がかかる。99は小碗底部1/2片。底径3.5cm。光沢を持つ厚めの緑灰色釉がかかる。100は青白磁碗小片。内面雲文などを浅くヘラ切りする。101~103は陶器。101は褐釉壺口縁部1/4片。復元口径9.6cm。口端部に重ね焼き痕跡と思われる砂粒が付着する。102・103は底部。1/4片・1/2片で、復元底径8.6cm・6.2cm。内外面に102は灰色・黒褐色、103は黒褐色の釉がかかり光沢を持つ。104は鉄滓が付着した轆羽口片。105は古代の土師器脚部1/8片。復元底径11.0cm。調整は回転ヨコナデ。112は橢円形の不明石製品。長さ6.5cm、幅4.7cm、厚さ2.7cm。表面は磨かれ滑らかである。側面には黒色の墨と思われる黒色顔料が付着する。石材は安山岩か。113は石彈か石球1/2片。5.5×5.5cm、残存厚2.9cm。表面敲打調整痕が残る。石材は砂岩。玩具か。114は碁石か。1.8×1.9cm、厚さ0.3cm。黒色の粘板岩か。遺構の時期は以上遺物から13世紀後半~14世紀前半頃であろう。

SK046出土遺物 (Fig.12) 106は土師器壺1/2片。口径12.8cm、器高2.4cm。調整は体部回転ヨコナデ、外底部は糸切りで板状厚痕が残る。

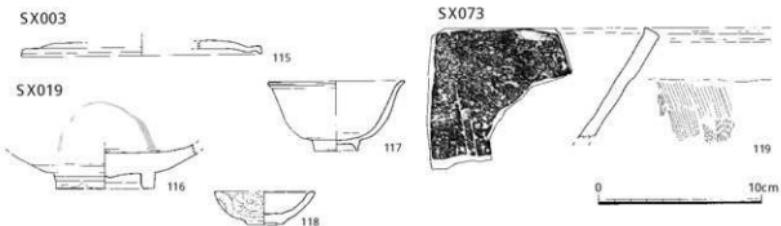


Fig.13 SX003・019・073出土遺物 (1/3)

SK057 (PL.5- 3) II区で検出した不整橢円形の土坑。長軸長1.35m、短軸幅0.87m、深さ0.33mを測る。埋土は褐色砂と黒褐色砂質土が主体。出土遺物は中世土師器・瓦質土器の細片少量含む。

SK074 (Fig.10・12、PL.5- 4) II区西側で検出した平面形がほぼ円形を呈し、SD075を切る土坑。規模は直径1.27m、深さ0.48mを測る。埋土は黒褐色土で黄褐色砂ブロック少量混入。出土遺物 中世の土師器・須恵器・中国産陶磁器など少量出土。107は土師器の壺1/8片。復元口径14.2cm、器高2.7cm。体部調整は回転ヨコナデ。

SK077 II区で検出したSK031の下で検出した橢円形状の土坑。長軸長1.0mを測る。鈍い黄褐色砂で下層黒褐色土ブロック混入。出土遺物は中世土師器細片少量含む。

SK078 (Fig.10・12、PL.5- 5) II区西側、SK074の南側で検出した平面形が不整橢円形を呈す土坑。底面は西側が一段深くなる。規模は長軸長1.15m、短軸幅0.87m、深さ0.45m。西側下層に礫石が4個ほど出土した。埋土は黒褐色土を主体とする。出土遺物 中世の土師器・輸入陶磁器などが少量出土。108は土師器小皿1/6片。復元口径9.8cm、器高12cm。体部調整は回転ヨコナデ。

SK083出土遺物 (Fig.12) 109は瓦玉。5.3×5.0cmの青磁碗底部を再利用したもの。縁辺を打欠き成形している。表面は明オリーブ釉がかかるが、高台内は露胎。

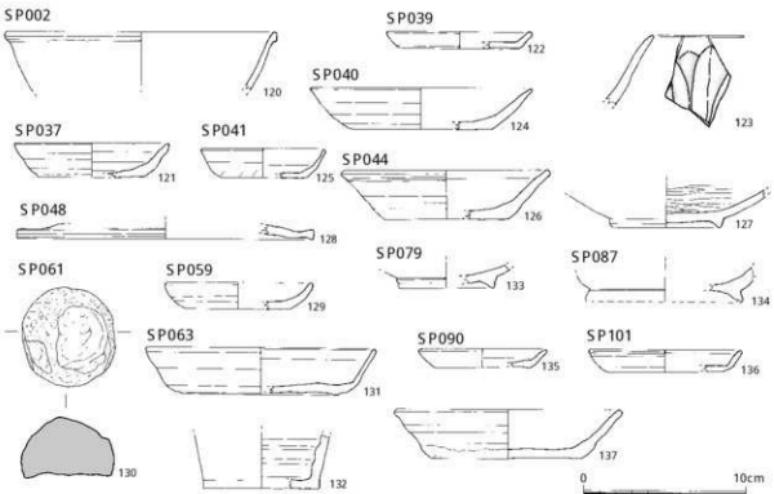


Fig.14 ピット出土遺物 (1/3)

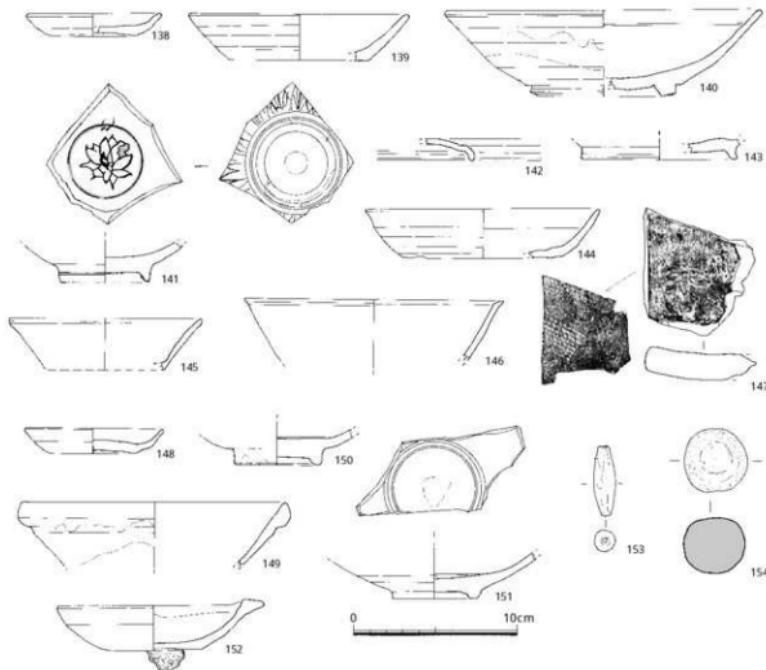


Fig.15 遺構面・表土出土遺物(1/3)

SK091 (Fig.10・12、PL.5-6) II区南西側で検出したSK032に切られる土坑。多数の遺構と切り合いで完全ではないが平面形状は長方形を呈すと思われる。規模は長軸長1.80m、短軸幅1.05m、深さ0.55mを測る。底面中央部は一段深くなる。埋土は黒褐色土が主体である。出土遺物 中世の土師器・須恵器・輸入陶磁器などと、鉄釘・炭化物などが少量出土。110は土師器小皿1/4片。復元口径9.6cm、器高1.0cm。体部の調整は回転ヨコナデ、口縁部にススが付着。灯明皿か。

SK102 II区2面で検出した不定形土坑。SK074下で検出した。SK074の残存部の可能性がある。出土遺物は中世土師器の細片など少量含む。

④ 摾乱・不明遺構出土遺物 (Fig.13)

115はSX003出土。須恵器の蓋口縁部1/10片。復元口径14.6cm。調整は回転ナデ。8世紀後半のもの。116-118はSX019出土。116は肥前磁器の青磁皿底部で見込みに赤褐色の鉄漿があり、重ね焼き痕跡がある。117は陶器小碗1/2片。口径8.2cm、器高4.2cm。高台部以外オリーブ黄色釉の施釉。118は白磁の紅皿1/2片。口径6.1cm、器高2.0cm。厚めの釉がかかるが、外面唐草状の文様が浮き彫りにされている。119はSX073出土。土師器擂鉢。内面斜めハケ目で5条のタテ櫛目。外面も斜めハケ目。

⑤ ピット出土遺物 (Fig.14)

1面・2面についてピット番号毎に報告する。SP101以外は第1面検出のピット。120はSP002出土。口縁が玉縁状を呈す青磁碗口縁部1/4片。復元口径16.6cm。121はSP037出土。土師器小皿1/5片。復元

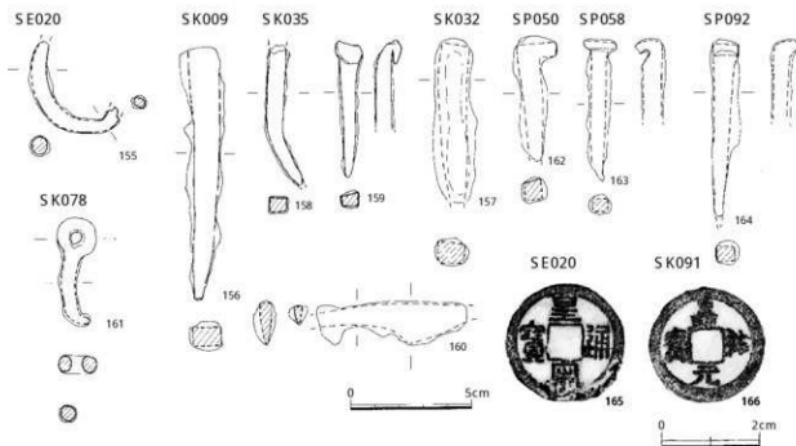


Fig.16 各遺構出土金属製品 (1/2 · 1/1)

口径9.4cm、器高2.1cm。122・123はSP039出土。122は土師器小皿1/4片。復元口径8.8cm、器高1.0cm。外底部糸切り。123は龍泉窯系青磁碗II類口縁部片。124はSP040出土。土師器環1/5片で復元口径13.6cm、器高2.5cm。外底部糸切りで板状圧痕がある。125はSP041出土。土師器小皿1/4片で、復元口径7.6cm、器高1.7cm。126・127はSP044出土。126は土師器の环1/6片。復元口径12.7cm、器高3.0cm。外底部糸切りで板状圧痕。127は瓦器椀底部。内面ミガキ、高台部と外面はナデ。128はSP048出土。須恵器蓋小片。復元口径18.0cm。8世紀後半のもの。129はSP059出土。土師器小皿1/4片。復元口径9.0cm、器高1.6cm。外底部糸切り。130はSP061出土。石弾か球の1/2片。6.1×5.7cm、厚さ3.8cm。底面の欠損面は潰れ意図的な成形か。表面敲打調整痕や使用痕が残る。石材は砂岩。131・132はSP063出土。131は土師器環1/2弱。復元口径14.0cm、器高2.8cm。外底部糸切り。132は陶器壺底部1/5片。復元底径7.0cm。光沢のある灰黄色～浅黄色釉が薄目にかかる。133はSP079出土。土師器環の底部1/5片。134はSP087出土の土師器底部小片。135はSP090出土。土師器小皿1/8片。復元口径7.8cm、器高1.1cm。外底部糸切り。136・137は第2面のSP101出土の土師器。136は小皿1/4片。復元口径9.2cm、器高1.4cm。137は环1/4片。復元口径13.9cm、器高3.0cm。いずれも外底部糸切りで板状圧痕。

◎ 遺構面・表土出土遺物 (Fig.15)

遺構面出土 138～142はⅡ区第1面出土。138・139は土師器。138は小皿2/3片。口径8.2cm、器高1.4cm。139は环1/5片。復元口径13.4cm、器高2.8cm。いずれも外底部回転糸切りで、138は板状圧痕が残る。140は青磁の高台付皿1/2片。復元口径19.2cm、器高5.3cm。オリーブ灰色釉がかかるが、体部外面下半から高台部は露胎、内面見込みは輪状の釉剥ぎ。置付に重焼き痕跡がある。141は明代の青花碗C群底部。見込みは圈線と花卉文。高台内面砂粒付着。142～147・154は第1面下砂層中。142・143は須恵器。142は环蓋。143は高台环の底部1/4片。復元底径9.4cm。調整は回転ナデ。いずれも8世紀後半～9世紀前半か。144は土師器环1/5片。復元口径14.2cm、器高3.0cm。体部回転ナデ、外底部回転

系切り。145・146は白磁。145は皿IX-1c類。1/4片で復元口径11.6cm。灰色釉がかかるが、口縁部は口剥げ。146は碗VIII-3類。復元口径15.6cm。灰白色釉がかかるが表面ピンホールに入る。147は須恵質の平瓦小片。厚さ1.5cmと薄手である。凹面細かい布目、外面縄目叩き調整。154は砂岩製の石球か石弾。ほぼ円形で直径3.9cm、厚さ3.4cm。敲打調整で丸く仕上げる。

表土・廃土・攢乱出土 148は口縁を1/4欠く土師器小皿。口径8.3cm、器高1.6cm。器壁は摩滅するが、外底部回転糸切り。149は白磁碗IV類口縁部1/8片。復元口径16.4cm。灰白色釉がかかるが体部外面下半は露胎。釉部分には貫入が入る。150は龍泉窯系青磁碗I類底部。底径5.3cm。オリーブ灰色釉がかかるが高台内は露胎。151は朝鮮王朝の粉青沙器皿底部。底径5.2cm。明オリーブ灰釉で、見込みは2重の白土象嵌が巡る。152は陶器皿。完形で口径11.4cm、器高3.8cm。口縁部は片方が舌状の把手が付く。内面はオリーブ黄釉がかかるが、外面は露胎。口縁部周辺にススが、外底部に鉄塊が付着する。灯明皿か。153は土錘。完形で長さ4.3cm、径1.3cm、孔径0.25cm。

⑦ 各遺構出土金属製品 (Fig.16)

155-164は鉄製品。155はSE020出土の丸く曲がる鉄製品。鉤状の鉄製品か。156はSK009出土の釘。残存長10.3cm。157はSK032出土。鋸がひどいが釘か。残存長6.7cm。158-160はSK035出土。158・159は釘。残存長5.6cm・5.7cm。158は先端、159は頭部が曲がる。160は鋸がひどく推定だが刀子か。残存長6.2cm。161はSK078出土。頂部が円環で先端が曲がる製品。金具の一部か。円環部は直径1.6cm。162はSP050出土。頭部が曲がる釘。残存長4.8cm。163・164は釘。163はSP058、164はSP092出土。残存長5.6cm、7.0cm。165・166は中国北宋銭。165はSE020井筒出土の「皇宋通寶」(初鑄1038年)。直径2.5cm、重さ3.3g。166はSK091出土の「嘉祐元寶」(初鑄1056年)。直径2.4cm、重さ3.2g。

3.まとめ

以上、調査の概要について述べた。ここではそれらをまとめ若干のまとめとする。

今回の調査で検出した遺構の時期は大きく2時期に分かれる。I期は中世前期、II期は近世の時期である。I期は12世紀後半以降14世紀前半頃までの時期である。井戸や溝・土坑・ビットなどの集落遺構があり、扁平な石の上に柱を立てたと思われる柱穴があることから建物が建っていたことが考えられる。遺構の多くの時期は13-14世紀のもので、鎌倉時代が中心となる。南北朝・室町時代の遺構は確認出来ない。II期の江戸時代は瓦戸などである。江戸時代以降は現代まで生活域として使われていく。一画を占める恵比須社は江戸時代の奥村玉蘭の『筑前名所図会』にある古い社で、正月三日、玉せせりの祭事で有名である。この祭りは八幡宮祭の市始めて、この社より尺余の木玉を奪い取りしながら本社の神前に納める神事である。恵比須社は今でこそ一角しかない狭い社であるが、筥崎宮の末社である。当調査区も江戸時代には社の一部であったかも知れない。

狭い調査範囲での成果のため、箱崎遺跡の性格を解明するには至らないが、箱崎遺跡の研究を進める上での一助となれば幸いである。

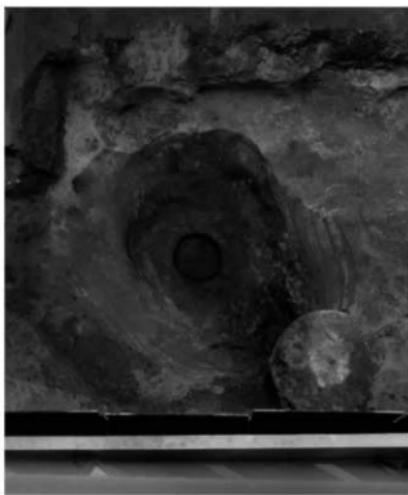
隣接する調査地点の報告書

第3次調査：『箱崎遺跡2 箱崎遺跡群第3次調査報告』 市報第262集 1991

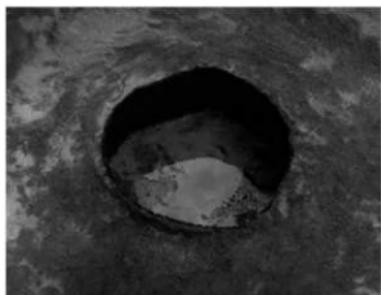
第63次調査：『箱崎41 箱崎遺跡第63次調査報告』 市報第1094集 2010



(1) I 区調査区全景（北から）



(2) SE020 (北から)



(3) SE020井筒（西から）



(1) II区第1面全景（北から）



(2) II区第2面全景（北から）



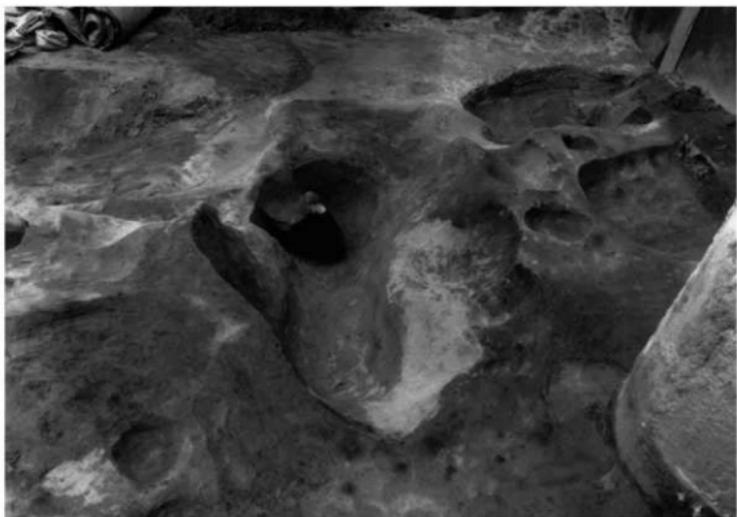
(1) II区第3面砂丘面（北から）



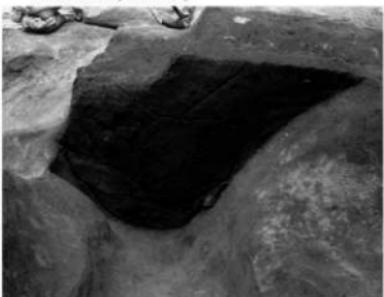
(2) SD075（西から）



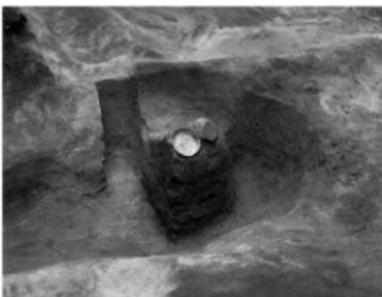
(3) SD075西壁土層（東から）



(1) SK035 (南から)



(2) SK035土層 (南から)



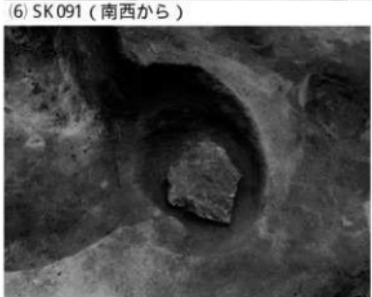
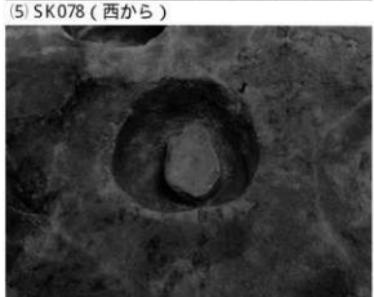
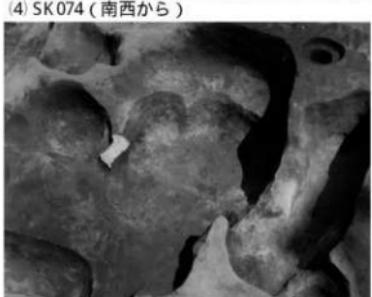
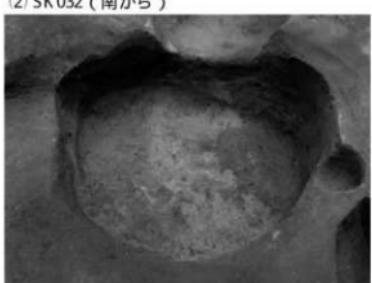
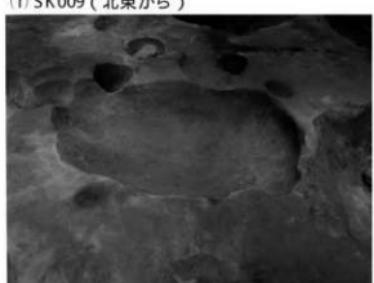
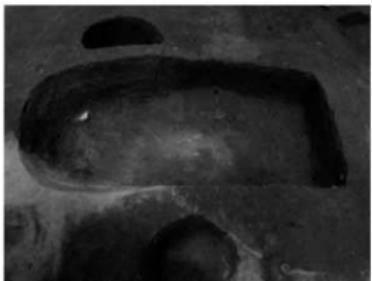
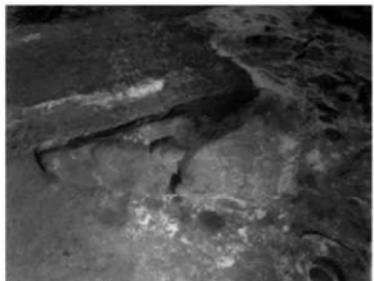
(3) SK035遺物出土状況 (東から)



(4) SE023 (北西から)



(5) SK031 (西から)



報告書抄録

ふりがな	はこざき							
書名	箱崎45							
副書名	箱崎遺跡第66次調査報告							
卷次	45							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1164							
編著者名	山崎龍雄							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810- 8621 福岡市中央区天神1丁目8- 1 TEL 092- 711- 4667							
発行年月日	西暦2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はこざきいせき 箱崎遺跡第66次 調査	ふくおかしひがしくはこざきいっちょめ 福岡市東区箱崎1丁目2699 番1号	40130	0127	33度37分 00秒	130度25分 24秒	20100614 ~ 20100713	127	店舗付 共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
箱崎遺跡 第66次調査	集落	中世、近世	井戸、土坑、溝、柱穴	古代土器・須恵器・中世土 器・須恵器・中国産輸入陶磁 器・近世国産陶器・瓦				
要約	調査区は篠崎宮北側の砂丘上に立地する。北側は建物基礎で破壊を受けていたが、南側で保存の良好な遺構面を検出した。遺構は屋敷地割りと思われる溝や井戸・土坑などである。遺構時期は中世前期13~14世紀頃と近世江戸後期の二時期に分かれる。篠崎宮創建時頃と思われる遺物が少量出土した。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1164集

箱崎45

— 箱崎遺跡第66次調査報告 —

平成24年3月16日

発行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 高松印刷有限公司
福岡市東区松島1丁目4-10
(092)611-0573